

評論 2005年の北海道経済

8月●駒大苫小牧高校、夏の甲子園連覇の表と裏 横島 公司

道内スポーツ界の現状と課題

2005年、冬の全国高校サッカー選手権決勝をたまたまニュースで見ている、ひとつ印象に残るシーンがあった。それは鹿児島実業高校（鹿児島）イレブンが、後半（か延長）開始前、選手全員が集まり、それぞれ指を一本天に突き立てる仕草をしたことであった。それはまさしく、駒大苫小牧高校ナインが甲子園で行った仕草と全く同じものだったのである。

駒大苫小牧高校が、昨年夏の甲子園において道内初の優勝を達成したことは、いまだ記憶に新しいところである。そして今夏の甲子園においても優勝を遂げ、全国でも僅か6校しかない夏の連覇を成し遂げた。連覇の難しさについては改めて、述べるまでもないが、平成の怪物と言われた松坂大輔投手を擁した横浜高校ですら成し遂げられなかったことを考えるならば、彼らの成し遂げたことは、まさに快挙というべきであろう。

しかしながら優勝直後、事態は一変した。野球部長の暴力事件という「不祥事」の発覚である。この問題について詳述する余裕はないが、要するに問題はそれを隠蔽したことに尽きる。一時は優勝旗を剝奪されるかどうかという局面まで事態は発展したが、高野連の判断により、優勝は否定されなかったことで、あっという間にこの問題は人々の話題から消えていった。ただ一言するなら、この問題は単なる高校野球のみに止まらない、つまるところ日本全体が昔から現在に至るまで抱えている、「教育という名の

暴力」と「愛の鞭」という相反する概念の対立について、いわば「パンドラの箱」になる可能性もあったのである。しかしその点について議論が殆どなされないまま問題が終息してしまったことは個人的には残念である。

ただ、その結果かどうかはともかく、去年の「狂騒」とすらいえる程の熱情はいくぶん沈静化し、TVも去年よりはその過熱ぶりを抑えたように見えたこと（相も変わらず再放送を延々と流しはしたが）は、せめてものことにあるように思われた。

しかしながら、この不祥事は彼ら駒大苫小牧の成し遂げた事を何ら傷つけるものではない。それは、冒頭に挙げた鹿児島実業高校の姿が証明している。彼らにとっては、競技の違いも不祥事も、恐らくどうでもよいことで、駒大苫小牧の示した夢の形を同じ高校生として自分たちも同じように実践したのであろう。駒大苫小牧が人々に与えた勇気というものがあるとしたならば、それはあるいはこのようなものであったのかもしれない。

道内のスポーツ環境

一方、道内をとりまくスポーツ環境も、ここ数年で大きく様変わりしている。

その大きな流れの一つは、以前にも本誌第1号でも取り上げた道内初のプロ野球チームである北海道日本ハムファイターズであろう。2003年にフランチャイズを東京から札幌に移したファイターズは、今年で3年目を迎えた。日本

評論 2005年の北海道経済

ハムの東京時代の「低人気」は野球ファンの間ではむしろ常識ですらあったし、さらに北海道における巨人ファンの根強さなどから、筆者は当初、その効果に正直懐疑的であったことを覚えている。しかし、積極的なファンサービスとアピール、さらに道内出身選手を獲得するなど、当初から彼らの本気ぶりを窺うことはできた。何より、天性の「千両役者」新庄剛志選手の獲得成功は、とてつもなく大きな効果をもたらした。新庄選手のパフォーマンスはファンを一層盛り上げ、その盛り上がりは声援となって選手たちの背中を押した。この人気は、おそらく選手達にとっても驚きであっただろうし、この声援が2004年のプレーオフで人々を感動させる程の力を選手達に与えた事は間違いない。そして、ファンの声援という美酒を知った彼らは、ファンの期待に応えるべく一層奮起した。強くなければファンは離れるという事を何より恐れたからだ。そしてファンサービスも積極的に行っていった。それらの結果、わずか3年で、ファイターズは北海道の地にしっかりと根をおろそうとしている。

一方、プロサッカー球団であるコンサドーレ札幌は、札幌に本拠地を構え、2006年には10年目の節目の年を迎える。コンサドーレ札幌には、いまさら定着という言葉を使うまでもないだろう。コンサドーレの10年の歴史は、多くのドラマに満ちている。なかでも岡田武史監督（現横浜Fマリノス監督）時代（1999～2001）におけるJ1昇格の過程などは、今でもサポーターの間では語り草となっている。しかし岡田監督退任の翌年には再びJ2に降格した。この2度目の降格以来、コンサドーレは5カ年計画を策定した。その趣旨は地に足のついた経営と、高額な選手補強に頼らないチーム強化を図ることにあり、監督として柳下正明氏を迎え、2年目の今期は一時J1に肉薄する勢いを示した。今期こそJ1に向け、サポーターの期待は大きい。しかしながら、コンサドーレ札幌は、その多く

は初期段階での過剰投資（高額選手の獲得など）のツケ等により、財政的には厳しい状況にある。近年ようやく危機を脱したかに見えるものの、一時は企業でいう債務超過の状態にまで陥ったことすらある。しかしながら、その負債額といえば、富裕なプロ野球球団の一年の年俸総額にすら満たない程度なのだ。

札幌版「アルビレックス新潟」

10年にも及ぶ歳月を経てもなお、未だ過去の負債から完全に抜け出すことのできないコンサドーレ札幌と、かたや3年にして道内に揺るぎない地位を築いたかに見える北海道日本ハムファイターズ。両者の差を、スポンサーの体力の問題、またはスポーツの規模や形態がそもそも違うとってしまえばそれまでのことだが、北海道全体のスポーツ界として考えるならば、これは一つの問題といえないだろうか。

北海道に密着した球団を持ち、かつ言わずと知れた大企業である日本ハムは、セレッソ大阪のメインスポンサーの一つであることは、北海道では余り知られていない。セレッソ大阪がある以上、日本ハムがコンサドーレを支援するような事は難しいのかもしれない。であるならば、日本ハムでなく、「北海道日本ハムファイターズ」がコンサドーレのスポンサーになるという形式であればどうだろう。あるいはもっと考えを進めて、ファイターズとコンサドーレの両者が、正式に提携関係を持つことは不可能であろうか。

このような道内スポーツ界のいわば「大同団結」それ自体は、理念として決して不可能なこととも思われないし、何よりプロ野球球団とサッカー球団の結合は史上初であり、恐らく日本全体に与える衝撃も大きかろう。ただ、基本的にファイターズに得のある話でもないため、実現するならばコンサドーレにもそれ相応の覚悟は必要であろう。例えば、コンサドーレとい

評論 2005年の北海道経済

う名称を変更するような決断もあるいは必要となるかもしれない。しかしながら、道内スポーツの発展、という視点で考えるならば、北海道で生きていく道を選んだプロ球団同士が、如何なる方式であれ提携しあうことは全く不自然なことではない。要は決断の問題であろう。

また、北海道は様々な分野における有力選手を多数輩出している。ことにウインタースポーツにおいては他県の追随を許さない層の厚さを誇っており、2006年に開催されるトリノオリンピックにおいても、多くのオリンピック選手が道内出身である。さらに、柔道、水泳等の分野においても多くの日本代表クラスの人材を生み出している。提携の幅を広げ、これら他のスポーツ界の選手をまたその輪に加えていくこともできよう。そしてこのようなスポーツの垣根を取り払った取り組みは、新潟県に本拠地を持つアルビレックス新潟が既に実現している。その大きな流れを作るためには、野球とサッカーとい

う大きな団体が手を握ることがもっとも大きなアナウンス効果があろう。

そしてこれを母胎として、中学高校、あるいはそれ以下の年代における育成を一貫して行う仕組みを実現していったならば、地方における新しい教育モデルの形として、北海道から全国に発信していくことも可能となろう。

とはいえ、この実現には、非常に多くの課題があることは承知している。その実現は容易ではないだろうし、現時点では白昼夢にすぎないだろう。しかし、北海道スポーツ界における中長期的な課題、あるいは壮大な「夢」として、北海道版「アルビレックス新潟」のような動きが今後起こってくることを期待したい。

〈参考文献〉

『北海道新聞』、『朝日新聞』の関連記事。